電脳村構想は山田村に何を残したのか
ー人的交流とグリーンツーリズムの観点からー

What did the "Cyber Village Plan" leave for the Yamada Village
-From the aspect of people exchanges and rural tourism-

まちづくり／論文

地域キュレーションコース
村井　美慧
Misato Murai

◉研究の背景と目的

山村では過疎化及び高齢化が進行し、集落機能の低下、さらには集落そのものの消滅に繋がることが懸念されており、空き家の増加や耕作放棄地の増大等の様々な問題が発生している。富山県においても上記のような山村問題は課題となっており、県内の中山間地域でも様々な地域活性化事業が取り組まれてきた。本研究の研究対象である富山県旧山田村（以下、単に山田村と表記する）は都市部との情報格差是正によって過疎化に歯止めをかけるため、1990年代後半に村内希望家庭へのパソコン無料配布という他に類を見ない地域情報化事業に取り組み、国内外からの注目を集めた。本論文では、山田村における地域情報化とその後の地域活性化の取り組みの過程を整理し、その関連性を明らかにすることに加え、地域情報化当時の構想を再評価するとともに、情報化が残したと考えられる人的交流やグリーンツーリズムの成果を評価することを研究目的とした。

◉地域情報化の過程

山田村の地域情報化は1995年に山田中学校の教師からのパソコン通信導入の要望によって始まった。NTT の協力の下、村にインターネットを導入し、1996年には村内家庭の7 割にあたるパソコン配布希望家庭にパソコンを貸与した。パソコン利用の支援のため、村内では各集落から選出された村民によるパソコンリーダーが組織された。1997年には、各家庭がインターネットに接続され電子メールでのやり取りが可能となり、メーリングリストも開設された。また、山田村の情報化に興味を持った村外の学生が企画した「電脳村ふれあい祭」が開催された。運営には、学生を支援する村内団体「こうりゃく隊」等を加え、「パソコンお助け隊」としてのパソコン支援を中心に、地域資源を体験する交流イベントが多数企画され、その後2002 年まで毎年開催された（図1）。2004年には村内に光ファイバー網が整備されたが、2005年の市町村合併により山田村独自の地域情報化事業は終了した。

図1 電脳村ふれあい祭'98 の様子　（関係者提供）

◉地域情報化が残したもの

山田村の地域情報化は、パソコン操作の支援者が自然発生的に組織化されたことで、村内外との交流を促進した。情報化の支援を主な目的として始まった電脳村ふれあい祭は、パソコンの陳腐化などに伴い年々交流に比重が置かれるようになった。現在、山田村の地域活性化を中心的に担う「NPO 法人山田の案山子」は、「こうりゃく隊」を前身としており、電脳村ふれあい祭でのイベントの企画・運営を通して現在のグリーンツーリズム事業に関わるノウハウを蓄積してきた。電脳村ふれあい祭における地域資源を活用した交流イベントは山田村のグリーンツーリズムの原点といえる（図2 右）。さらに、この時期に生まれた交流は、地域情報化が頓挫してからも「清水そば峠」におけるそば打ち技術の習得等山田村の地域活性化事業の中に生きていることが明らかとなった（図2 左）。人的交流は、経年劣化し使用できなくなるハードな資源と比べて、継承され拡大する可能性があることから地域情報化が残した重要な財産といえる。また地域情報化時代に描かれた構想は、在宅ワーク推進というコロナ時代の動きにも通ずる先見の明があった。在宅ワークはコロナ収束後も一つの働き方として確立されていくことが予想され、現在の山田村がこうした構想に取り組むことは、かつて地域情報化に取り組んだ経験という財産を活かし、持続的な地域活性化を進めることへの重要な方向性になり得ると考える。

地域活性化事業の成功の鍵は、民間の自発性であり、情報化支援を通して、住民が自ら地域の活性化に向けて行動するという経験は重要であった。地域情報化の成果は、現在情報化の独自性や形に残る資源としては残っていないかもしれないが、地域情報化を通して生まれた人的交流や、グリーンツーリズムの経験は今日の山田村の形成に貢献しており、貴重な財産を残したといえる。

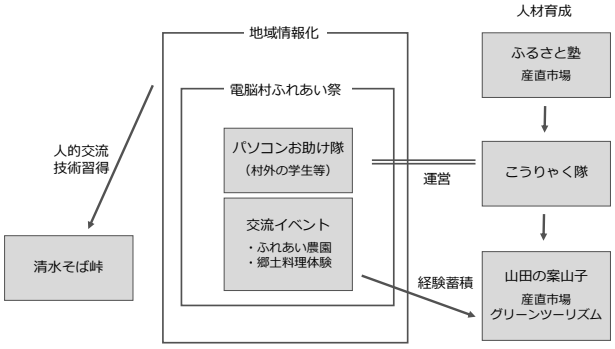

図2 地域情報化とその後の地域活性化の関連図　（筆者作成）